

異文化「奇習」への接し方

—— 近代日本における纏足への眼差しを中心に ——

薛 梅

The Communication Mode of “Exotic Custom” in Different Cultures: Centering on Opinions about Foot Binding in Modern Japan

Abstract: Orientalism is a kind of prejudice on the part of western countries toward the oriental world. The research goal of this paper is to explain how modern Japan placed itself between the West and the East, using the changing attitudes of modern Japan toward foot binding, a uniquely Chinese custom, as an example. The paper rediscovers the Japanese version of orientalism and analyzes the reasons for its growth and development. The paper suggests, as a way of avoiding the cultural domination of orientalism, new possibilities of attitude to women who have undergone foot binding, in order that they be humanized.

キーワード：纏足、女性、日本的オリエンタリズム

1 纏足に関する先行研究

1-1 批判を主流としての纏足研究

日本の学界では従来纏足研究において、纏足の歴史と反纏足運動に重点をおいている。纏足の起源についての研究は、早いものでは那珂通世¹、最近では岡本隆三²、黄紅萍・中里喜子³が挙げられる。

反纏足運動の研究において、深沢秀男⁴、坂本ひろ子⁵、高嶋航⁶、夏暁虹⁷などがあげられるが、ここではオリエンタリズムに触れた東田雅博⁸の研究を挙げたいと思う。東田は反纏足運動と深くかかわった英国女性（リトル夫人）についての叙述において、彼女の立脚点が女性解放ではあるが、それは帝国主義者（母性的帝国主義者）のものであったこと、従来オリエンタリズムは男性中心の価値観として扱われていたところに女性の視点を加えた点を評価している。さらに、同氏は『纏足の発見—ある英国女性と清末の中国—』⁹で、イザベラ・バードと比較しながら、リトル夫人が参与していた反纏足運動と

英国での女性参政権運動との関係を明らかにしたうえで、オリエンタリズムの双方向性（支配者と被支配者の相互的作用）を呈示した。

ほかに、ジェンダー・イデオロギーと女性の主体性から纏足の考察を行った星野幸代¹⁰は実録と小説を併用、分析した結果、纏足は女性（母・纏足婆・娘）が父権制社会で生き抜く戦略であり、制度化された母性に支えられたと同時に父権制を維持していたと述べた。スーザン・マンとリンダ・グローブ¹¹は異なる文化の出会いの場において、異なるものを抑圧する主要な要素であるセクシュアリティの分野において、纏足は他者の印を打たれたと述べている。ただし、同氏が他者と見做される纏足は近代化に関わらない（スーザン・マンの言葉を引用すれば「植民者の体制やその政策・戦略にかかわらず」とする点に対しては、筆者は疑問を呈したいと思う。

1-2 女性文化として捉えられた纏足

これまでの纏足研究では、纏足は男性の性的嗜好、儒教文化のもとで女性に求められていた慣習で、女性の身体を傷つけ、行動を制限していたため、常に批判の対象とされ、中国の女性解放運動と緊密に関わってきた。纏足文化においては、男性が主体であり、女性は単なる受け身の存在と見なされてきた。それに対してコロンビア大学の女性文化史家ドロシー・コウ¹²は、女性の視点から纏足の文化的な価値を評価し、女性はむしろ纏足文化の担い手であったと主張した。

以上から、従来の纏足研究では纏足そのものの歴史、官能性にしても、反纏足運動にしても、纏足をジェンダー、セクシュアリティ、女性解放の枠組みの中での議論することが多かった。本論では、こうした枠組みを脱してオリエンタリズムという観点から纏足女性の新たな位置づけを模索する。なお、東田はオリエンタリズムにおいて纏足を検討していたが、大英帝国におけるアジアへの眼差しに限られており、同じアジアに属する日本における纏足への眼差しには触れていない。

2 オリエンタリズムの呪縛

2-1 サイドのオリエンタリズム

従来のエキゾチシズムに止まっていた東洋研究に新たな道を切り開き、オリエンタリズムという斬新な視点を与えたのはエドワード・W・サイドで

ある。サイドによると、オリエンタリズムとはオリエント（東洋）に対する西洋の思考・支配様式である。その思考様式は地理的な遠隔性にに基づき、オリエントを後進性・奇矯性・不変性・受動性を帯びる「異質」な対立対象として造られてきた。その支配様式は西洋の地理的拡張を通して植民地主義、人種差別主義、自民族中心主義、帝国主義の立場からなされてきたのである¹³。

中国はオリエンタリズムの対象にあてはまるに違いないが、サイドが扱った分析対象は主として中東世界ということである。ゆえに、本稿ではサイドのオリエンタリズムに支配される異文化への見方に基づいて、近代中国における代表的な異文化「奇習」である纏足への眼差しを新しい研究対象として分析したい。

2-2 日本とオリエンタリズム

2-2-1 「日本的オリエンタリズム」の系譜

「日本的オリエンタリズム」の視点は姜尚中、川村湊、杉原達、重村智計、梁仁實等の著作、論文においてすでに提出または論及されている。従来、「日本的オリエンタリズム」の対象は主として、在日朝鮮・韓国人（姜、杉原、重村）、または、日本の植民地限定（川村）であったが、中国を焦点とする研究はほとんど見られない。また、時期についても、従来の研究者は主に「日本的オリエンタリズム」に関して、第二次世界大戦前・後に目を向けていたが、その以前から、「日本的オリエンタリズム」はすでに出現し、或は日本人の意識に働きかけていたのではなかろうか。さらに、サイドが発見した「異質」とされた「東洋」への思考様式は「日本的オリエンタリズム」に影響を与えていたであろうか。以上の疑問から、「日本的オリエンタリズム」の再検討が迫られてくると考えられる。

2-3 本研究の論点

昔から多くの中国文化を受け入れてきた日本は何故か纏足を受け入れなかっただけでなく、1880年代に至るまでそれを批判する言説も現れなかった。中国で纏足が野蛮な陋習と言われるようになったのは、日本の近代の始まりとされる明治維新より凡そ20年前の、アヘン戦争以降のことである。近代に入って、文明開化と称して従来の東洋文化を軽んじて西洋文化を急速に

取り入れた日本では西洋基準（オリエンタリズムの文化的支配）で「文明」と「野蛮」が再定義された。東洋と西洋の間で日本人が自分をどう位置付けていたのかということが纏足への眼差しに投影されてきた。その眼差しの変遷を明らかにして、さらに、原因を分析していきたいと思う。オリエンタリズムの文化的支配がその眼差しの変遷の要因の一つであると想定して、本論では「日本のオリエンタリズム」の再検討を試みたい。それに基づいて、いかにオリエンタリズムの文化的支配から脱出してどのように纏足女性を語るかを論じた上で、脱オリエンタリズムという土台に立って異文化への接し方の新たな可能性を探ってみよう。

3 無関心から評価化へ（～1894年）

3-1 纏足への無関心時期（～1870年代）

纏足が悪習慣と言われるようになる以前から、日本人は纏足に接する機会があった。当時、纏足はせいぜい他国の一種の文化習慣として扱われた。当時の日本人の纏足への眼差しは後々の態度に比べて、無関心であり、他人事のように考えていたと言っても過言ではない。1880年代まで、纏足に関しては異文化習慣の研究対象となっていないばかりか、日本の新聞記事にもまだ載せられていない¹⁴。纏足の記述は専ら日本人の旅行者によって書かれた紀行文中にしか見られない。例えば、1862年、納富介次郎¹⁵の「上海雑記」¹⁶には次の記述がある。「清國婦女ノ風ハ、至テ微弱ニ育ツルコトヲ貴ブ。故ニ富貴家ノ女子ニアラザルモ、幼年ヨリ脚の大ニナラザル様ニ仕立ツルト云フ。中略 亦脚小ニシテ歩行至テ不自由ナル様ナリ」。この時期、纏足の習慣は、女性の小足、歩行の不自由という点に目が向けられて記録されているに過ぎない。

3-2 纏足への評価が否定的になった時期（1880年代～1894年）

纏足への無関心から急速な批判的評価になった画期はおそらく写真家のトムソンの『中国とその人々の図像¹⁷』が1873/1874年に出版されたことであろう。その後、1887年、纏足が朝日新聞¹⁸においては初めて明白な態度で「纏足」を「悪俗」と見做されている。極端に小さい脚を追求するために足の成長を阻害することに対する明確な否定的評価付けであり、それは日本人の纏足への批判の嚆矢であった。

纏足の良し悪しについては否定も肯定もしない態度から「悪」とみなす態度に変化した原因は、纏足の残酷性以外に、おそらく「西洋」と密接にかかわっているのではないか。纏足文化と接触するようになって、中日二国間の枠組みの中では、評価の対象にはならなかった。ところが、そこに西洋との関係性が加わるようになると、西洋と中国との明白な上下関係が生じ、評価も出来るようになった。資本主義と封建主義、拡張侵略と植民地という対立の中で確立されてきた先進的な西洋と遅れた清国という位置づけが定められた。こうした視座で、西洋女性と比較して、中国女性はいつも纏足に苦しんでいると見られたわけであろう。両者に挟まれて明治維新後近代化の道を歩んできた日本人は、纏足は近代的文化にどうしても似合わないという上からの視線（優越感）で近代中国を見ていたことが窺える。そこで、纏足への無関心から否定的になった転機にはオリエンタリズムが帯びる他者への優越感が潜在的に作用していると考えられるのである。

ところが、オリエンタリズムにおける感覚には日本と西洋との間に微妙な差異があると思われる。かつてオリエンタリズムの「異質な対象」にされる恐れがあった日本はこの時期に西洋列強と完全には同一視しがたかったが、少なくともオクシデント的心情を持つことによって、「先進」に近づきたいという心情を出していたと考えられる。それゆえ、こうした複雑な心情は日本独特のオリエンタリズム（以下、日本的オリエンタリズム¹⁹と言う）に収斂していったとするのが適当であろう。纏足への無関心から評価化（悪視、否定）という転換を考えれば、この時期に日本的オリエンタリズムが芽生えたと言えよう。日本的オリエンタリズムは地理的な要因からではなく、日本が根本的に西洋への接近を望む心情に基づいて、「野蛮」な清国と一線を画しようとする意図によって建てられ、萌芽してきたのである。ところが、その中には、先進・文明と後進・野蛮の対立により、「悪」視（後進的な中国への）が自明的に存在しているが、オリエンタリズムに見られるようなオリエントを「異質」と見做す視座は含まれていなかった。しかも、纏足文化の担い手である纏足女性（人）への批判には及んでいなかった。

4 纏足への注目（1894年～20世紀初頭）

4-1 纏足への関心が寄せられてきた時期（日清戦争）

1894年7月から1895年3月にかけて日清戦争が行われた。纏足への注目が

一気に高まってきたことは清国と日本との接触が頻繁になってきた契機——日清戦争の直接の結果と言えよう。とくに政治家、軍人たちは清国へ足を運び、意識的に記録して、敵国の情報収集を行っていた²⁰。纏足にふれる時、政治的な眼差しが無意識に加えられていた。敵国の国情調査ともいえる紀行観察では清国の悪習文化とされた纏足への関心が戦前より高くなってきたが、纏足文化そのものに集中されて、文化の担い手としての人、つまり纏足女性への注目は欠けていたと考えられる。

4-2 台湾における統治者姿勢（日清戦争後～20世紀初頭）

東京朝日新聞 1898年3月6日付「臺灣女子の風習（承前）臺灣女子生活の状態 臺灣女子の性質」²¹では「臺灣の女子が種々敗徳の所業を演じて少しも顧みざるは蓋しこの自立の力無き一事が一大原因をなさずんばあらず其自立の力無きは纏足の一事これが起因をなさずんばあらず嗚呼此土地をして日本化せしむることは決して容易の業にあらず」と記述されている。要するに台湾女性に自立の力がないことと種々の敗徳について、纏足が一大原因と見た。かつて清国の領土であった台湾には清国の印が刻まれていたことは新しい統治者となった日本が統治する上で種々の不都合が生じると考えたことであろう。清国の痕跡を抹消して、「日本化」するために、何か行動を取らなければならないと日本人は考えたと思われる。そこで、その打開策を探ることが迫られてきた。こうして、纏足文化への日本の介入は、植民地主義（植民地統治）の介入であるといえよう。

要するに、日清戦争を経て、西洋列強と肩を並べて対清戦勝国への仲間入りを果たしたことが実際に日本人の心情転換をもたらしたのであろう。ここからすでに日清戦争前から向けられていた先進的な西洋と後進的な清国という眼差しに加えて、さらに蔑視的視座が形成された。纏足文化と接触する主体は個々の日本人でありつつも、この時期になってはじめて日本政府または日本という国家的なものになった。すなわち、新しい植民地となった台湾における纏足に対して、これを悪視する個々人の眼差しに加えて、日本国家の統治者としての眼差し（植民地統治または植民地主義）が加えられた。その結果としては、それまでに萌芽してきた従来の日本的オリエンタリズムに植民地主義という新たな要素が加わって、日本人の纏足への眼差しに作用していると考えられる。

5 激動期の中国における纏足への眼差し（20世紀初頭～1920年代）

5-1 医学界における纏足研究の風潮

この時期には、植民地に関わる多くの日本人が纏足に対して、これまでにない強い関心を示した。そのなかで挙げられるのは那珂通世²²である。那珂は先頭に立って「支那婦人纏足ノ起源」²³において、纏足の起源から現状までを詳しく述べた。一方、医学界の纏足研究も開花し始めた。伊能嘉矩²⁴、水科七三郎²⁵、無記名²⁶、天籟生²⁷、松下禎二²⁸等々があげられる。

5-2 「奇」「異」

新聞記事では以前と同様、纏足は悪習として取り上げられていたが、徐々に纏足を「奇」「異」と見なしはじめた。また、新聞記者は纏足そのものに執着しつつ、纏足した女性へも注目を払うようになった。纏足婦人の足だけではなく、歩き方、化粧法、体付きまで、いわば、全人的な批判が始まった。例えば、纏足を「悪習」として批判するのみならず、中国の女性美までが否定されるようになった²⁹。讀賣新聞に掲載された「亞細亞 支那の婦人風俗」³⁰は「鷗州婦人」と「日本婦人」の美人観を挙げたうえで、それぞれが「支那婦人」と「非常の相違」、「餘程違ふ」、「歩み方も實に異様」と書いている。それは近代国家（欧州とそれに追随する日本）を基準として一義的に価値・評価を定めた現れだと考えられる。ところが、「日本婦人」も同様にオリエントの顔を持つことは疑いようがない事実である一方、「支那婦人」との差異を強調しているのは、オリエンタリズムにおけるオクシデントとオリエントのあいだに維持されてきた差異感覚に当てはまると考えられる。その差異をつくる過程では、中国との同一性を回避しながらも、現に矛盾したままで日本的オリエンタリズムが生じたのである。また、差異を強調するのは、まさにオリエンタリズムにけるオリエントの持つ奇矯性と「異質」な東洋という視座が一致していたと言えよう。

5-3 纏足から離脱する女性³¹への眼差し

5-3-1 清国における解纏足運動³²への眼差し

20世紀に入って、女性教育の新興³³に伴い、一部の中国女性が目覚めて家に閉じこもらず、無知、繊弱に囚われない、新しい姿を現した。日本はこのような「新しい中国女性」³⁴に目を向けはじめた。解纏足運動については「不

纏足会」についてはしばしば報道³⁵され、「閉鎖的な」封建社会から抜け出したい中国人の姿と中国女性の不纏足に注目が集まった。

近代教育を受けて解纏足の前線に立つことになった女子留学生に大きな関心が払われたが、彼女たちに対して、日本が多少の優越感を持っていたのも事実であろう。例えば、1906年の実践女学校卒業生についての記事は「(卒業生)今日の動静は實に本邦女性の長所を模し來りて大に見るべきものあるに至れり」³⁶と述べていた。日本への留学を通じて遅れていた中国女性の救い主になった優位者の姿勢を示していたと思われる。讀賣新聞1907年6月23日付の記事³⁷が女子留学生の服装が日本化してきた傾向を大いに賞賛していたことから、日本が清国に対する優越感を持っていたことも分かるであろう。讀賣新聞1906年6月15日付³⁸では実践女学校の副校長青木が清国女子留学生について、「日本の精神の注入に勉め之れが矯正を計り居たりしに僅々一年にも充たざる今日此頃には大に改まりて」と述べている。彼女らの女子としての美德の不足を言い、「日本の精神の注入」により「矯正」を計る姿勢からは、女子留学生を単なる受け身として扱い、彼女らを日本女性に改造しようという意図が窺えよう。

清国の女子教育に積極的に取り組んでいた下田歌子は日清提携論者であり、「この國(清国)に對する圓滿、具足した政治的友好關係を保たなくては、思ひのままに東洋の盟主たる地位を確立することはむつかしい」³⁹と言っていた「東洋の盟主」支持者でもある。恐らく、それこそ、上記の下田の話から流れてきた優越感の源ではなかろうかと考えられる。その他、政治的な方略として留学生を受け入れたことは史実からも実証できよう。例えば、清国留学生の受け入れ経緯に関わる日本側の機密文書には「我国ノ感化ヲ受ケタル新人オヲ老帝国内ニ散布スルハ、後來我勢力ヲ東亜大陸ニ樹植スルノ長計ナルベシ」⁴⁰という真の意図が窺えるであろう。

上記言及した日本人教育者は、解纏足が「東洋の盟主」あるいは「大陸進出」という目的で、中国女子留学生を「良妻賢母」という日本女性の理想像にそくして改造するためである⁴¹。

しかし、纏足文化の中で育ってきた彼女らは決して単に受動的に改造されることを待つだけではなく、むしろ主動的能力を失ってはならず、近代教育を受ける機会さえ与えられれば、積極的に変わっていくことができ、「良妻賢母」の範疇を超え、「男」のためではなく、「人」としての権力を求めて動い

た。たとえば、実践女学校における女学生の不纏足活動について、東京朝日新聞 1905 年 8 月 27 日付「清国女学生の不纏足会」⁴²の記事に見られるように、自ら纏足反対の旗を掲げていた。清国女子留學生が組織⁴³を結成したり、活動を行ったり、雑誌を出版⁴⁴することは稀ではなかった。「防俄に就いて大に演説討論を試み中には女學生迄も雜り居り候て」⁴⁵、1905 年 11 月留學生取締規則⁴⁶への反発運動から秋瑾をはじめとする留學生が一斉帰国に至ったり⁴⁷、「故國上海に開設せらるべき女學校建設經費據金の目的にて（中略）音樂會を催す」⁴⁸というような活動に参加していたりした。清末日本における女子留學生が結成した組織は「日本留學女學生共愛會」（1903）、「中国留日女學生會」（1906）、「女子復權會」（1907）、「留日女學會」（1911）等が挙げられる。創刊した雑誌としては、『女學報』（1903）、『女子魂』（1904）、『白話報』（1904）、『天義』（1904）、『中国新女界雜誌』（1907）、『二十世紀之中国女子』（1907）、『留日女學會雜誌』（1911）があった⁴⁹。

さらに、自ら纏足反対の旗を掲げて、「日本留學女學生共愛會」の機関誌『江蘇』第三期で中国女性の悪習として纏足を批判した⁵⁰。秋瑾はこうした運動の代表者として知られる。この時期、纏足女性の定義が布で縛られ、小さい靴に入れられる足の持ち主である女性だとすれば、それ以前に纏足のままで留學してきた清国女學生の一部は近代教育と留學生活の影響の下で、だんだんその定義からはずれていった。すでに変形してしまった（年齢によっては自然の状態に戻れないことがある）足は過去の印でありながら、時代転換の証でもある。

以上に見てきた事例から、この時期に纏足への眼差しにおいて優越感を潜ませながら、纏足女性との直接の接触を通して纏足女性に対する単一的な「悪」「異」の眼差しが複雑になり、政治的戦略に基づく清国留學生の受け入れと共に、日本的オリエンタリズムが築かれてきたと言えよう。

5-3-2 台湾における解纏足への眼差し

日清戦争後、日本の植民地となった台湾では、纏足習慣を除去することが急がれ、新たな統治者となった日本が解纏足の過程に直接に関与することになった。讀賣新聞 1903 年 8 月 29 日付「臺灣女子教育の趨勢」では、次の内容を述べている⁵¹。台湾における労働力の不足を解決するためには、女子労働力の供給が必要とされたが、台湾の女性には「第一纏足の慣習あること、

第二教育の素養なきこと」により要求に応えられないのが現状である。日本の当局者は纏足を女性労働力の阻害要因と見なしていた。

この時はまだ中国大陆での纏足女性を他人事と考えているといえるが、台湾に対する態度は根本的に違っていた。その違いの原因は、台湾における解纏足の呼びかけは労働力不足を補う手段として扱っていたからである。中国内陸と台湾における日本の解纏足への眼差しの違いは、植民地統治者という立場の有無に由来していたと言えよう。また、纏足による女子労働不能が植民地経済の支障になったと意識してきた当局は、台湾の纏足への関心を一層高めた。台湾における纏足撲滅を行うなかで、植民地主義は日本のオリエンタリズムのなかでさらに熟成していた。それらは日本人の纏足への眼差しに大きな影響を及ぼしていたと考えられる。

6 固定化された纏足女性像（1920年代～1930年代）

6-1 シノロジー⁵²における纏足研究

日本における「支那学」は古来の漢字研究から始まり、内藤湖南が西洋のシノロジーを強く意識し、京都大学において漢学と明確に決別した際、この名称で中国学研究を提唱した⁵³。1920年代に入って、「支那学」では風俗習慣としての纏足の研究が盛んに行われるようになった。

井上紅梅⁵⁴の『支那風俗巻上・下』⁵⁵『支那各地風俗叢談』⁵⁶で、南方熊楠の男子纏足の伝説⁵⁷への紹介、片岡巖の『臺灣風俗誌』⁵⁸、服部宇之吉⁵⁹の『支那研究』がその例として挙げられる。この時期、纏足は終始に奇習文化として数多くの風俗著作で紹介され、多角的に研究されていた。纏足に関する学問研究は、以前に比べてかなり盛んになり、纏足という習慣文化自体を紹介することが多くなるが、それは纏足女性との接触機会が増したことに関わっていると考えられる。また、この時期における日本の対中政策に左右されず、比較的客観的な纏足文化を多くの日本人に紹介していたことは評価されるべきであろう。

6-2 対中経済政策と纏足へのまなざし

中外商業新報 1921年4月3日付⁶⁰で農商務技師の永井治良は「一般に教育なく義務観念に乏しく盜癖あり且つ中支以北の女子は纏足の習慣あるを以て動作敏活ならず従って技術の練磨向上を期し難し又工女の養成には多大の勞

費を要する」と述べ、中国人への蔑視を示す一方、女子労働力の開放を呼びかけ、日本と中国との経済提携を求めている。

他方、これらとは趣を異にする報道が見られる。満州日日新聞 1921年8月2日付⁶¹では、「日支親善」のために纏足風習に対して「理解を持ち其理解の上にとって交際する様にならなければ眞に日支親善など出来よう筈は無い」と記されている。第一次世界大戦への参戦に乗じ、1915年に袁世凱政府に対して「対華二十一カ条要求」を突き付け、日本は山東省の利権獲得などを実現した。1919年5月ヴェルサイユ講和条約で大戦中に日本が提示した二十一カ条の要求が否決されなかったことに抗議して北京を中心に学生運動（五・四運動）が巻き起こった。これより日本への反発が一層強まった⁶²。中国の排日風潮を抑えるために、纏足に対して批判・禁止を行い続けていた日本が以上のように一転して「理解」・「容認」の態度を示したのは、国家的戦略が文化への眼差しを左右した例証と言える。そこでは、「日支親善」のような対外戦略の下においては、それまで「悪」「異」と批判されてきた纏足が急に「理解」「容認」すべき対象として扱われたのは皮肉であろう。

6-3 纏足女性は歩行できないのか

後藤朝太郎⁶³は電光石火の如く中庭を横切った纏足女性の姿を書き記した⁶⁴。また、鳥山喜一も纏足女性が歩行不能について反論を出した⁶⁵。

纏足が実際には歩行の顕著な障害とならない場合もあるのに、従来何故纏足による歩行不能に拘ってこれを強調し続けてきたのであろうか？纏足女性の歩行が困難であるか否かについての記載に矛盾が生じた原因の一つは、恐らく、纏足がもたらした歩き方の変化から生じたと考えられる。次に、纏足の施術が終わってから慣れるまで時間がかかることにあると思われる。最後に、中国女性の解放を語る際に、纏足がもたらした「歩行不能」という印象は、中国女性が遅れた原因として誰でもすぐに思いつける、しかも一般人にとっても理解しやすい、中国女性の束縛の象徴であると思われる。それゆえ、纏足女性の歩行実態を詳しく検討することなく、鵜呑みのままで「不能」と繋げて、纏足女性の印象を固定化してしまう傾向は、従来の「停滞的」な東洋というオリエンタリズムの幻想と軌を一にしていると考えられる。さらに、こうして、纏足女性への印象が固定化され、変わらない（むしろ日本人の目から見れば変えない乃至変えられない）纏足女性を、あの遅れた中国とすぐ

結びつけるようになっていった。

6-4 「支那通」後藤朝太郎の見た別様な纏足女性（1920年代～1930年代）

日中戦争以前から、日本軍閥はスパイ活動を行い、多くの「支那通」が養成された。その他に、組織としては1907年に設立された南満州鉄道の調査機関「満鉄調査部」⁶⁶が有名である。彼らは中国へ足を踏み入れ、地理、資源、民情、文化を調査した⁶⁷。それと違って、「支那中毒」と言っても過言ではない、中国民衆の生活習慣を夢中に観察していた自由主義的「支那通」⁶⁸と言われる後藤朝太郎である。

繊弱で男性に従い、権力がないと見られていた纏足女性は後藤の目から見れば、これとは正反対のイメージを持っていた。彼の纏足女性への観察はミクロの家庭までに及んでいた。「媾天下」という纏足婦女のもう一面は中国の家庭関係から提示された。それに、後藤は「支那人の残忍性」を論ずる時、纏足女性と「残忍性」を繋げたうえで、中国の家庭内では「事実上女天下」であることを結論付けた。また、新しい中国女性については、後藤は大家族制における纏足女性と深い関連性があると説いた。従来纏足女性像への眼差しは纏足一点への拘りであるのに対し、後藤は独特な視座で大家族の中で修養を積んだ纏足女性の姿が新しい中国女性の姿に反映していることを示唆しそこには家庭内で権力を持つ姑の纏足女性がいれば、苦勞してしっかりしてきた若嫁の纏足女性もいるので、後藤は幅広い纏足女性の姿を提示したと言える。

この時期においては、纏足女性に触れる際に、纏足した足の一点に関心が集中しがちで、蔑視、悪視が常に伴い、纏足への眼差しが固定化されていた。この点が不変な東洋というオリエンタリズムの思考様式と一致していると考えられる。ところが、支那通である後藤朝太郎が比較的捉われのない透徹した視座から素顔の纏足女性像を呈示した。

7 象徴化された纏足女性像（1930年代～1945年）

7-1 小説から見た纏足

纏足が描かれた作品の中では纏足女性は背景として登場するのが圧倒的に多かった。宮本百合子⁶⁹の『赤い貨車』（1928）、『坂』（1935）、『広場』（1940）、『道標』（1947～1948）では纏足女性がいつもモスクワの道端で小売商売をす

る人物として登場する。また、石塚喜久三⁷⁰の芥川賞受賞作「纏足の頃」⁷¹(1943)で描かれた強制的に纏足させられた少女は言うまでもなく、当時の敵国である中国の負の面を一層強調していた。横光利一の長編小説『上海』⁷²(1932年)では、纏足女性は遅れた中国の代表として登場していた。井上紅梅が訳した『魯迅全集』⁷³の中に収録された『風波』(1920年)と『故郷』(1921年)で描かれた纏足女性はいずれも封建性を帯びたイメージであった。言葉、表情及び動作を通じて纏足女性の「豆腐西施」楊二嫂⁷⁴と「九斤老太」⁷⁵を皮肉的な対象とする。それ以外、小栗虫太郎のミステリー小説『紅毛傾城』⁷⁶、富田鷹夫の「俳句 母はずっと纏足で歩いてきた」⁷⁷、那須辰造は小説『五月の纏足』⁷⁸がある。

総じて言えば、文学作品で纏足女性は常に非文明の象徴として登場していた。遅れていた中国を表象する時に、纏足女性を借用することは当時の日本人作家の共通認識であると言えよう。さらに言えば、纏足を通して、中国を女性化していたと考えられる。纏足女性と遅れていた中国とを自然に結びつけようとする心情が日本人の心に植え込まれていたと考えられる。

7-2 新聞紙面に載せられた纏足

1930年から1945年までの十五年間は、帝国主義日本が積極的に中国大陸に侵出した時期である。清末からの纏足解放は不纏足運動と展開し、女学生・女子留学生を先頭とする近代女子教育の振興、辛亥革命、新文化運動、五・四運動、大革命時代の1920年代を経て、纏足女性の数はだいぶ減った。その減少の過程は纏足していた女性が布を解いて纏足をやめたり、新生の中国女性が纏足しなかったりする過程であった。さらに日中戦争⁷⁹は残された纏足女性の民族意識の覚醒を促し、纏足の終焉を加速させた。戦争時期における纏足への眼差しは常に色濃いナショナリズム的情緒に染められ、弱者に対する高位にいる姿勢・軍国主義的強者の誇示、戦争賛美及び植民地の統治正当化が混ぜられていた。例えば、満州日報1932年6月3-5日付の「関東州⁸⁰」に「唯一の解決法は隣國たる日本の救助の手と全世界の同情とにより満洲を水火の悩みから救い出すより他ありません」というように、満州占領・統治を通してあたかも日本が同情心を持ち、解放者・救い主かのように手を出さねば、纏足、アヘンを喫すなどの陋習を除去できないかのように振る舞っていたことが読み取れる。つまり、纏足廃止は植民地統治を正当化する道具と

されていたと考えられる。植民地統治を誇示するため、満洲日日新聞 1942 年 8 月付⁸¹の記事では、満州建国十周年の成果としては陋習である纏足の消失が挙げられ、それを「躍進の巨歩」と称していた。

日中戦争を契機として、纏足女性のナショナリズムは完全に覚醒した。「年老いた農婦たちが纏足の足で歩ける精一杯の速度で、洛陽の主な寺々に向かって進行していた⁸²」と記されているように、爆撃された街を逃れている纏足女性は目の前で、家が焼け、爆撃で身近な人が殺されたのを見た。こうした経験から復讐の火焰を燃え立たせたと推測できよう。こうして戦争の刺激を受けて、立ち上がって抗日救国運動に積極的に参加していた纏足女性は少なくない。一方、共産党、国民党の婦女動員政策も纏足女性のナショナリズムの覚醒に働きかけていたとみられる。「小さな足（纏足）の者や幼い子供や老人は草取り、糞拾い、その他補助的な仕事を援助する⁸³」「1939年初め、大会に参加した二二四八人の女性のうち半数が纏足をしていた⁸⁴」と記されているように、纏足女性は後方支援として農業生産に従事したり、婦人抗日大会に出席し、戦場に赴いたりという行動を通じてナショナリズムの情熱を示した。彼女たちは纏足に囚われていた精神・意識を捨て、近代中国女性へと姿を変えていった。この時期の纏足女性は近代の新しい中国女性の母体であり、過去形であり、進行形でもあるといつてよかろう。それゆえ、不変のものとして捉えがちな近代日本の眼差しと違って、纏足女性は停滞ではなく、むしろ漸次に近代の新しい中国女性へと変わっていくと言ってもよかろう。

この時期においては、固定化された纏足女性像が受動的・不変的・後進的な過去の象徴になった。1931年の満州事変に始まり1945年に至る日中戦争の期間にかけて、纏足廃止は戦争と植民地統治を正当化する道具とされてきた。それに加えて、日本の大陸進出に伴っていた帝国主義、軍国主義は日本のオリエンタリズムの支配と軌を一にしていると考えられる。

8 終章

8-1 近代日本の纏足への眼差しと日本的オリエンタリズム

本稿で近代日本の纏足への眼差しを焦点として、各時期の特徴をまとめ、その原因を分析して整理、帰納を行った。結果は以下のである。

1870年代までは、日本人の纏足への無関心時期であった。この時期における日本人と纏足との接触の記載は限られている。清国に渡航した日本人は「纏

足」を異文化習慣として扱うにとどまり、纏足の良し悪しについては論及していない、無関心の態度を示していた。その原因は三点から解釈できよう。

①接触が少なかったこと。1870年代まで、纏足が上流階級婦人の間だけで流行し、19世紀末から初めて広がってきたので、纏足女性との接触が少なかったことが想定できよう。②纏足した素足を見ていなかったこと。日本人は纏足布に包まれる変形した素足を見ることがないはずであるから、纏足がもたらした残酷な身体改造まで思いが至らなかった。③明治維新後、先進的な西洋に目を向ける一方、阿片戦争を経て、半植民地に陥った後進的な清国へは無関心であったこと。

纏足への無関心から急に不評へと転じたのは、1880年代から日清戦争直前までの時期である。急に「悪」視とされた原因は以下二点から分かる。まずは、纏足が女性への残酷な身体改造であるということにある（接触が多くなって「纏足」が前より詳しく知られることと素足の画像の公開）。次は、明治維新から、日本で徐々に定められてきた先進的な西洋と遅れている中国という位置づけから生じたと思われる。纏足への無関心から評価化（悪視と否定）という転換から考えれば、この時期には日本的オリエンタリズムが芽生えたと言えよう。そこで生じた日本的オリエンタリズムは地理的な原因ではなく、日本が根本的に西洋への接近を望む心情に基づいて、「野蛮」な清国と一線を画しようとする意図によって建てられ、萌芽してきたのである。ただし、纏足、その文化習慣自体が批判の嚆矢になってしまったが、纏足女性を「異質な存在」として扱うことには及んでいなかった。

日清戦争がきっかけとなり、日本と清国が急接近した。1894年から20世紀初頭までの時期には纏足への関心が寄せられてきた。この時期における日本の纏足への眼差しについては、三点を分けてまとめた。一点目、纏足文化の根源として、儒教社会から女性の道徳への規制、圧力が明らかになった一方、文化の担い手としての纏足女性への注目に欠けていた。二点目、清国の敗戦で終わった日清戦争の後、軽蔑的かつ差別的な中国観が成り立ってきたことは、纏足への眼差しに投影されていた。三点目、日本は纏足文化に関与させられたこと。日清戦争の結果として、台湾が日本の植民地になった。従来纏足文化が不在（自国文化に纏足がなかった）であった日本は、日清戦争を通して、台湾の統治者の立場に立って、纏足を労働力の供給、植民地経済の発展と繋げて、迅速に纏足の除去を行い始めた。この時期においては纏足

文化と接触する主体は個々人でありつつ、国家という全体的なものが介入してきた。その結果としては、萌芽した日本的オリエンタリズムに植民地主義（台湾統治）が加えられ、これらの関係が日本的オリエンタリズムの雛形を形成した。

日露戦争、第一次世界大戦を経た日本は正式に列強の一員になった。20世紀初頭から1920年代までは纏足が注目されていた時期である。医学界での纏足研究の風潮が起きた一方、纏足への批判の高まりに伴い、纏足文化に潜む纏足女性が注目され始めた。まず、以前より露骨に蔑視の言葉を使い始め、それに伴う人への全般的否定、日本婦人との「差異」を押し出した。それは纏足文化自体を超えた中国・中国人への嫌悪のあらわれであると思われる。ここで日本は纏足に対しての「悪」視観を持ちつつ、初めて「奇」「異」を強調するのは、纏足への眼差しにおける日本的オリエンタリズムにオキシデントの「異質」な東洋という視座が加わったということであろう。そして、その「異」を作る過程では中国との同一性を回避しながらも、現に矛盾したままで日本的オリエンタリズムが生じた。次に、近代女子教育の成果の一つとしては、女子学生は纏足から離脱して、中国女性の印象に新たな一面を与えた。それに、近代中国女子教育に大きな力を入れていた日本人教師、政府関係者らは纏足女性を単なる受身として扱って、「良妻賢母」という日本女性の理想像にそくして改造を行っていた。このように、この時期では纏足への眼差しにおいては、潜在する優越感を抱きながら、纏足女性との直接的な接触を通して纏足女性に対する単一的な「悪」「異」とされてきた眼差しが複雑になりつつ、政治的戦略を目的とする清国留学生の受け入れと共に、日本的オリエンタリズムが築かれてきた。

1920年代から1930年代までは、纏足への眼差し（纏足女性像）が固定化された時期である。それはまさにオリエンタリズムの凍てついて永久に変化しないものと化してしまう傾向が日本人の纏足女性への眼差しで具現されていたと考えられる。陋習として「支那学」という領域で盛んに議論されたり、国家的戦略の下で経済提携を推進めるため、纏足女性解放を呼びかけたり、いずれも纏足女性像を纏足一点に集中し、蔑視、悪視が常に伴っていた。それを切り開いて比較的合理的な視座から総合的な纏足女性像を呈示したのが後藤朝太郎であった。さらに、後藤は纏足女性と新しい中国女性との連続性を肯定した面も従来と大いに違っていた。

究極的に固定化された纏足は1930年代から1945年の日中戦争終結まで、徹底的に不変的・後進的な象徴であった。この時期において、小説に登場する纏足女性はつねに非文明の象徴であった。そこで中国を女性化するのはオリエンタリズムそれ自体がもつぱら男性的な領域（女性は通例男性的な権力幻想によって唯唯諾諾と従うものなのだ）⁸⁵であることと一致している。1930年から日中戦争前の準備期と日中戦争の進行に伴って、纏足廃止は侵略、植民地統治を正当化する道具になった。その中で、中国人の愛国心、ナショナリズムが完全に呼び覚まされ、纏足女性も積極的に纏足布を解いたり、纏足したままで救国運動に参加していた。1931年の満州事変に始まり1945年に至る日中戦争の期間にかけて、日本の大陸進出に伴って一層露わとなった帝国主義、軍国主義は日本的オリエンタリズムに組み入れられた。結局、優越感を下支えとした植民地主義・帝国主義の下で纏足への眼差しに日本的オリエンタリズムが加えられた。そこで、日本的オリエンタリズムは最終的に形成された。

8-2 纏足女性をどう語るか

まず、近代反纏足運動のなかで、男性からの強制＝女性への抑圧という点しか見えないのはオリエンタリズムに内在する受動的な東洋像の具現化ではなかろうか。次に、日本的オリエンタリズムが纏足への眼差しに働きかけていた結果としては、「纏足」一点に集中され、繊弱、家に閉じ込められ、歩行不能の単一の纏足女性像が形成されてきた。しかし、家に閉じ籠っている纏足女性であれ、妓として生計を立てている纏足女性であれ、箒を持って若嫁を追い駆けている纏足女性（後藤が呈示した「媼天下」の女性）であれ、日本に留学中自ら反纏足を叫んでいた纏足女性であれ、それぞれの個々人の人生があったからこそ、近代中国纏足女性像が織り成されていた。最後に、オリエンタリズムではオリエントが議論の対象になる場合にも、オリエントは完全に不在なのであり、かわりにオリエンタリストと彼らの言葉のほう実在として感じられたのである。纏足女性が議論の対象になる場合に、纏足女性はずねに不在なのである。オリエンタリストが語ったオリエントは停滞的・受動的な反応者としてであったことを受けて、日本的オリエンタリズムは必然的に受動的・恒久的に停滞する性格を纏足女性に賦与して、さらに固定化、象徴化してしまった。しかし、実のところ、纏足していても潜在的

な主動的能力を失わず、積極的に変化を受け止め、決して変わることはないものではないと思われる。清国の女子留學生が積極的に近代教育を受け、自ら反纏足の旗を掲げ、人としての権力を求めたことは評価すべき点であろう。さらに、日中戦争で立ち上がった抗日救国女性軍人、纏足女性は纏足という身体上の「支障」に囚われず、むしろ行動で自己の存在と変化を訴えていたと考えられる。オリエンタリズムに付随した「異質」「停滞」という色眼鏡を通して眺めた纏足女性は奇矯かつ歩行もままならぬ唯唯諾諾な存在であり、しかも一個の独立した個人として認められることはないと思う。それゆえ、脱オリエンタリズムの視座が求められてきたのであろう。

8-3 脱オリエンタリズムへの傾斜

オリエンタリズムで欠落させられた(むしろ欠落した)「人間的なもの」(人間経験)はあらゆる外力(権力の不均質、先入観)によって歪められた眼差し(思考様式)で異文化と接触してしまうと考えられる。故に、異文化「奇習」と接する際、脱オリエンタリズムという土台に立つことが必要であると考える。本稿では、日本的オリエンタリズムが近代日本の纏足への眼差しに作用していたことから示されたように、まさに纏足(纏足女性)と接触する際に、日本的オリエンタリズムから脱出することが求められるべきだと考える。さらに、異文化「奇習」への接し方の新たな可能性を探求する過程で、もっとも重要なのは文化ではなく、それを担う人間との接触を常に心がけることだと考える。そのうえで、偏狭な視座を捨て去り、「単一」な世界ではなく、「多様」な世界という視座を持つことで初めて成り立つ純粋な心でこの世界の「奇」「異」を受け止めることが出来るようになると考える。

註

¹ 那珂通世「支那婦人纏足の起原」『那珂通世遺書』大日本図書 1915, pp.1-17 (本篇は1898.6 史學雜誌、9-6に掲載)

² 岡本隆三『纏足物語』弘文堂、1963

³ 黄紅萍、中里喜子「纏足の歴史Ⅰ」『東京家政大学生活資料館紀要2』1997 pp.125-138、「纏足の歴史Ⅱ」『東京家政大学博物館紀要3』1998, pp.135-145

⁴ 深沢秀男「変法運動と不纏足会」『四国学院大学論集35』1976年7, pp.25-37

⁵ 坂元ひろ子「足のディスコース—纏足・天足・国恥」『思想907号』2000, pp.114-161

- ⁶ 高嶋航「天足会と不纏足会」『東洋史研究 62号(2)』2003, pp.88-125
- ⁷ 夏曉虹(著) 藤井省三(監修) 清水賢一郎・星野幸代(訳)『纏足をほどいた女たち』朝日新聞社, 1998
- ⁸ 東田雅博「ある英国人婦人と反纏足運動」『史学研究 242号』2003, pp.1-19
- ⁹ 東田雅博『纏足の発見—ある英国女性と清末の中国—』大修館書店, 2004
- ¹⁰ 星野幸代「纏足をほどいた女たち(美と文化)」『名古屋大学言語文化部・国際言語文化研究科 言語文化研究叢書 2』2003, pp.65-75
- ¹¹ スーザン・マン/リンダ・グローブ(著) 小浜正子/リンダ・グローブ(監訳) 秋山洋子・板橋暁子・大橋史恵(共訳)『性からよむ中国史: 男女隔離・纏足・同性愛』平凡社, 2015
- ¹² ドロシー・コウ(著) 小野和子+小野啓子(訳)『纏足の靴 小さな足の文化史』平凡社 2005, pp.169-170
- ¹³ エドワード・W. サイド(著) 今沢紀子(訳)『オリエンタリズム』平凡社, 1986
- ¹⁴ 残された新聞資料を調べるところでは、纏足は出現しなかった。
- ¹⁵ 納富介次郎は文久2年(1862年)に幕府勘定吟味役・根立助七郎の従者として、同じ佐賀藩士・中牟田倉之助や長州藩の高杉晋作と共に上海に渡って貿易調査を行い、見聞録を作成している。三好信浩「明治日本における工芸教育の思想と実践—ワグネルとその人脈」『比治山大学現代文化学部紀要 No.11』, 2004, pp.1-22
- ¹⁶ 納富介次郎『幕末明治中国見聞録集成第1巻「上海雑記」』ゆまに書房, 1997, pp.110-111
- ¹⁷ J.Thomson, 『China and its people, in Early Photographs』, New York, Dover, 1983
- ¹⁸ 「上海通信(十月七日発)横濱丸便」大阪朝日新聞 1887年10月16日
- ¹⁹ 本稿でとらえられる日本的オリエンタリズムは異文化「奇習」への接触に限られ、それ以外の応用は再検討を必要としている。また、従来の「日本的オリエンタリズム」と区別するように、筆者が主張する日本的オリエンタリズムには括弧をつけないことにする。
- ²⁰ 尾崎行雄『幕末明治中国見聞録集成第3巻「1894.8 遊清記」』ゆまに書房, 1997, p.11, pp.43-44; 高橋謙『幕末明治中国見聞録集成第3巻「支那時事」1894年9月』高山房, 1997, pp.108-109, 192-193; 「雑報 戦陣見聞録(12の續)」東京朝日新聞 1895年3月24日等。
- ²¹ 「臺灣女子の風習(承前) 臺灣女子生活の状態 臺灣女子の性質」東京朝日新聞 1898年3月6日
- ²² 那珂通世(1851-1908)は明治時代の東洋史学者。日本東洋史学の鼻祖。朝鮮や中国の歴史の研究に専念し、明治21年9月から『支那通史』四巻五冊をつぎつぎに刊行、新しいタイプの史書として内外の絶賛を浴びた。その研究態度は中国の史書を主軸に日本・朝鮮の古典を批判的に分析して、東アジアの国際関係の歴史を明らかにし、さらに中央アジア、インド、イスラム圏をも含めた全アジア史の体系を構築しようとする雄大なものであった。『国史大辞典 第十巻』吉川弘文館, 1990, p.651

- ²³ 那珂通世「支那婦人纏足の起原」『史學雜誌 9-6』, 1898
- ²⁴ 「漢人の纏足」『人類學雜誌 20 卷』1904 ~ 1905、「支那漢族の女子に行はるる纏足の風」『人類學雜誌 20-229』, 1905
- ²⁵ 「震災ノ纏足ニ及ホシタル影響」『臺灣統計協會雜誌第 17 號』, 1906
- ²⁶ 無記名「蕃人の夫人纏足」『人類學雜誌 23 卷』, 1907 ~ 1908
- ²⁷ 「〔説苑〕支那婦人の纏足に就て」『風俗画報第 381 號』, 1908
- ²⁸ 「衣服及び食物に対する理想 (一〜七)」大阪朝日新聞 1916 年 1 月 1 - 9 日
- ²⁹ 例えば、「色々の支那」讀賣新聞 1902 年 12 月 12 日
- ³⁰ 「支那の婦人風俗」黙痴 讀賣新聞 1912 年 9 月 22 日
- ³¹ 纏足から離脱する女性：今まで纏足女性の中にないタイプ、つまり纏足布を解いた女性が出現した。そこで、彼女らは今纏足していないが、かつて纏足したことは疑いなく、纏足と切るも切れない関係を持っている。ゆえに、本稿で扱う「纏足への眼差し」という範疇に入れられると考える。
- ³² 従来の呼称は、纏足解放運動、不纏足運動、反纏足運動、天足運動などが挙げられるが、本稿では解纏足運動と称している。意味はほぼ同様である。
- ³³ 1898 年戊戌変法に教育改革、女学堂の設立 (1898 年に経善元、梁啓超、1902 年に蔡元培)、1906 年西太后「振興女學」の政令を出す、1907 年清政府は「女子小学堂章程」「女子師範学堂章程」を頒布等々。岡本隆三『中国社会が生んだ奇習 纏足』弘文堂、1963, p.172
- ³⁴ 本稿に言う「新しい中国女性」は纏足していない、且つ近代教育を受けて精神的に近代化した女性 (例えば、個人の自覚があり、自己主張、自己決定、社会進出等をする女性) を指す。纏足から離脱する女性も含まれている。
- ³⁵ 例えば、「上海通信 (西風女子教育)」東京朝日新聞 1897 年 12 月 1 日、「清國の婦女不纏足會」讀賣新聞 1898 年 6 月 24 日、「清國の婦女不纏足會」『家庭雜誌 (The home journal) 118』1898 年 7 月 15 日、「清國女學生の不纏足會」東京朝日新聞 1905 年 8 月 27 日等々。
- ³⁶ 「實踐女學校卒業生」讀賣新聞 1906 年 7 月 20 日
- ³⁷ 「清國女學生の近況」讀賣新聞 1907 年 6 月 23 日
- ³⁸ 「在京中の清國女學生 (下)」讀賣新聞 1906 年 6 月 15 日
- ³⁹ 故下田校長先生傳記編纂所編『下田歌子先生傳』, 1943, p.395
- ⁴⁰ 「機密第四十一号信 清国留学生ノ教育引受ノ義ニ関シ啓文往復ノ件」『外務省外交史料館所蔵、在本邦清国留学生關係雜纂』
- ⁴¹ その観点は中国人女子留学生に関する諸研究では意見が一致している。例えば、周一川の「中国人女性留学生のリテラシー—明治期を中心に」『歴史評論 (696)』, 2008, pp.52-53、同氏の「清末・民国初年における日本留学中国人女子学生像の変遷」『お茶の水女子大学人間文化研究年報 19』, 1995, pp.65-67、岩澤正子「女性の自立と日本語教育—日本語教育史の中の下田歌子—」『實踐國文學 43』, 1993, pp.57-58 等。

- ⁴² 「清國女學生の不纏足會」東京朝日新聞 1905年8月27日
- ⁴³ 日本留学女学生共愛会、中国留日女学生会、女子復権会、留日女学会。石井洋子「辛亥革命期の留日女子学生」『史論 (36)』,1983, p41
- ⁴⁴ 『女学報』(1903)、『女子魂』(1904)、『白話報』(1904)、『中国新女界雑誌』(1907)、『天義』(1907)、『二十世紀之中国女子』(1907) 石井洋子「辛亥革命期の留日女子学生」『史論 (36)』(1983), p45
- ⁴⁵ 「イロハ便」讀賣新聞 1903年5月5日、日露戦争後露国が第二期の撤兵を完了していないことに対する抗議。
- ⁴⁶ 加藤直子によれば、「留学生取締規則」の経緯は留学生の中から多くの革命分子を生み出すという実態→清国が留学生たちの革命運動取締を日本側に要請→1905.11「留学生取締規則」頒布→留学生は反発して、一斉帰国という事態に至った。
- ⁴⁷ 加藤直子「調査研究 東京女子高等師範学校の中国人女子留学生」『お茶の水女子大学女性文化資料館報 六』, 1985, pp.63-91
- ⁴⁸ 「清國女學生音樂會」讀賣新聞 1909年5月27日
- ⁴⁹ 江藤恭二、王 鳴、肖 朗「日本における清国女子留学生に関する一考察—近代の日中文化・教育交流史研究」『名古屋大学教育学部紀要 教育学科 (38)』1991, pp.313-323, 石井洋子「辛亥革命期の留日女子学生」『史論 (36)』, 1983, pp.31-54
- ⁵⁰ 周一川「中国人女子留学生のリテラシー—明治期を中心に—」『史評 (696)』2008, pp.50-62
- ⁵¹ 「臺灣女子教育の趨勢」讀賣新聞 1903年8月29日
- ⁵² シノロジーは「支那学」のこと。中国の言語・歴史・宗教・文化などを研究する学問。18世紀末のフランスで始まり、19世紀末にはシャパンヌ、コルディエらの大家が出て、めざましい業績をあげた。日本でも第二次世界大戦前、京都帝国大学を中心に支那学会が組織され、内藤湖南、狩野直喜が指導者として活躍、1920年には学会の事実上の機関誌としての『支那學』を創刊。戦後中国学と改称。『精選版 日本国語大辞典 第二巻』小学館、2006, p.369
- ⁵³ 石川泰成「後藤朝太郎の支那学の構想」『九州産業大学国際文化学部紀要第19号』1-18, 2001, p.9
- ⁵⁴ 井上紅梅：大正・昭和期の中国文学者。本名は井上進。大正2年上海に渡って放蕩生活をするが、10年『支那風俗』（全3巻）を刊行して注目される。『20世紀日本人 名事典 あ〜せ』紀伊國屋書店、2004, pp.291-292
- ⁵⁵ 井上紅梅「芝居の研究」『支那風俗卷上』日本堂、1921, p.372
- ⁵⁶ 井上紅梅『支那各地風俗叢談』日本堂、1924, p.103
- ⁵⁷ 南方熊楠「十二支考」猪に関する民俗と傳説」『太陽 二九ノ七』(1923)に男が纏足で女装して女に近づき、これを犯した事件という記述がある。
- ⁵⁸ 片岡巖『臺灣風俗誌』臺灣日日新報社、1924, pp.109-114
- ⁵⁹ 服部宇之吉 (1867～1939) は中国哲学者。東京大学卒。東京帝国大学教授、東方文化学院理事長、北京大学堂師範館総教習 (1902～1909)、ハーバード大学教授など

を歴任。日本では漢字の近代的研究の開拓者、諸学会の指導的立場にあって活躍、儒教とくに倫理思想の研究と古代の礼制に関する研究を最も得意とした。『20世紀日本人名事典 あ～せ』紀伊國屋書店、2004、p.832

- ⁶⁰ 「支那蠶絲業の將來彼我斯業者の提携必要」中外商業新報 1921年4月3日
- ⁶¹ 「日支親善は眞に理解の上に立たねば出来ぬ」滿洲日日新聞 1921年8月2日
- ⁶² 宋安寧「帝国教育会主催の中國大陸視察旅行—1919年の「第一回支那及滿鮮視察団」・1929年の「支那教育視察団」・1939年の「皇軍慰問並に日滿教育親善使節派遣」—」『社会システム研究 24号』, 2012, p.106
- ⁶³ 後藤朝太郎 (1881.4.16 ~ 1945.8.9) は明治~昭和期の中国言語学者。東京帝大言語学科卒、大学院に進み、段玉裁の説文学をドイツの少壮文法学派や比較・歴史言語学と結びつけ「支那語」の音韻組織を研究。また、110冊におよび中国の紹介書を出版。中国人民に同情し、軍部への反発を貫いた。昭和20年終戦直前、右翼に暗殺された。『20世紀日本人名事典 あ～せ』紀伊國屋書店、2004、p.955
- ⁶⁴ 後藤朝太郎『支那の社会相』雄山閣、1926、p.323
- ⁶⁵ 鳥山喜一『支那・支那人』岩波新書、1942、p.142
- ⁶⁶ 小林秀夫『満鉄調査部 (講談社学術文庫)』講談社、2015
- ⁶⁷ 張群 (著) 古屋奎二 (訳) 『日華・風雲の七十年: 張群外交秘録』サンケイ 1980、p.92
- ⁶⁸ 劉家鑫・李蕊「支那通」の中国認識の性格——後藤朝太郎と長野太郎を中心に」『東洋史苑 70・71』, 2008, p.37
- ⁶⁹ 宮本百合子 (1899-1951) は大正・昭和時代前期の小説家。1927年の暮、親友のロシア文学者湯浅芳子とソビエトに留学。ヨーロッパに滞在して、社会主義への共鳴をふかめ、1930年に帰国すると、直ちに日本プロレタリア作家同盟に加入。翌年秋日本共産党に入党し、日本プロレタリア文化連盟婦人協議会の責任者となり、多彩な活動と執筆を行う。プロレタリア運動の中で、マルキシズム史観に基づく執筆を多く残す。この思想運動のために検挙投獄が七回に及び、内務省の執筆禁止令や、検挙局の再度の取り調べを受け、心身の消耗で健康をそこねるが、獄中の夫を支えて健闘した。戦後いち早く日本共産党・新日本文学会・婦人民主クラブの創立・設立に参加。『日本近現代人名辞典』臼井勝美 [ほか] 編吉川弘文館、2001、p.1034
- ⁷⁰ 石塚喜久三 (1904-1987) は戦前、蒙古に渡り、華北交通鐵路局に勤務。蒙疆文芸懇話会の幹事を務め、1943年「纏足の頃」で第17回芥川賞を受賞。『諸君』40 (7), 2008, pp.177-180
- ⁷¹ 『纏足の頃』は石塚喜久三の短編小説。中国人社会に同化しようとするモンゴル民族を題材とした作品。昭和18年に発表。
- ⁷² 横光利一『上海』昭和7年 (1932) 著『横光利一全集第二巻』河出書房、1956、pp.43-45
- ⁷³ 魯迅 (著) 井上紅梅 (訳) 『魯迅全集』改造社、1932
- ⁷⁴ 楊二嫂への描写: ところがコンパス西施はわたしに対してはなはだ不平らしく、た

ちまち侮りの色を現し、さながらフランス人にしてナポレオンを知らず、亜美利加人にしてワシントンを知らざるを嘲る如く冷笑した。——『故郷』『魯迅全集2』学習研究社、1986、pp.86-87

⁷⁵ 九斤老太への描写：代々落ち目になるばかりだ今の長毛（革命党）は人の辮子を剪るので、坊さんだか、道士だか、見分けのつかぬ頭になった。昔の長毛（長髪賊）はこんなもんじゃない。わたしは七十九まで生き延びて、長生きをし過ぎた。昔の長毛はキチンとした紅緞子で頭を包み、後ろの方へ下げてずっと後ろの方へ下げて、脚の跟の方まで下げた。王様は黄緞子でこれも後ろへ下げていた。黄緞子、紅緞子、黄緞子——わたしは長生きし過ぎた。七十九歳だといった九斤老太——『風波』『魯迅全集2』学習研究社、1986、pp.74-75

⁷⁶ 小栗虫太郎「紅毛傾城」『新青年』10月号、1935

⁷⁷ 富田鷹夫「俳句 母はずっと纏足で歩いてきた」『新天地』20(12)、1940、pp.34-35「紅い纏足碧い纏足ことごとく母に亡びたる 纏足の無数の母に秋遍満誰が母ぞ纏足と野と夕焼くる 月光に母の纏足ぞまこと小さし 母ねむり纏足もやがてねむりし哉」

⁷⁸ 那須辰造「五月の纏足」『文芸レビュー 2-5』、1930、pp.73-93

⁷⁹ 中国では抗日戦争をいう。

⁸⁰ 関東州は中国、遼東半島南端部の旧称。大連、旅順、金州を含む地域。第二次大戦終結前は、日本の租借地であった。『精選版日本国語大辞典あ〜こ』小学館、2006、p.1294

⁸¹ 「建國十周年満洲國躍進の巨歩（1～6）」満洲日日新聞 1942年8月27日－1942年9月1日

⁸² ルシアン・ピアンコ（著）坂野正高・坪井善明（訳）『中国革命の起源 1915-1949』東京大学出版会、1989、p.200

⁸³ 岸辺成雄（編）『革命の中の女性たち』評論社、1978、p.118

⁸⁴ 『中国女性の二〇〇年——史料にみる歩み』中国女性史研究会（編）青木書店 2004、p.151

⁸⁵ エドワード・W・サイード『オリエンタリズム』、p.213